

尊問愚答記を讀む

千葉良導

一

此書は題號を一見した丈で、直に或人の間に答へられた書であるくらゐの事は察せられるが、扱その問の主人公は何人であらうか、淨土鎮流祖師傳の望西樓の傳記中には「花山四十八條の疑問を稟けて答釋を贈くる、世に尊問愚答記と云ふ」云ふ、また了吟の新撰往生傳三卷にも同様に「花山の四十八問を得て答釋を贈る、名づけて尊問愚答記と云ふ」云ふ、して見るに問の主人公は「花山」である、花山とは何人を指すのであらうか、日本佛家人名辭書には「花山天皇の敕問を拜して答釋を上る、世に尊問愚答記と云ふ」云あるが、其れは年代の上に於て非常な相違ありて、全く花山天皇でない事は明瞭である。そこで佛敎辭彙では「花園天皇の勅問に對して、宗要四十八條の答釋を上りしもの」云記してあるが、それも何の典據によつて花園天皇と定めしかその邊詳かでない、多分花山天皇では餘り年代の相違甚しく、そして望西樓は花園天皇の在位中存命して居つた事でもあるから、若し問者が天皇とするならば花山は花園の誤りではなからうかと思はれ、之れを花園に改めたのではあるまいかとも思はれる。

又檀王法林寺の傳説によるに「尊問愚答記は龜山天皇が花山院通雅を使者として、淨土の要義四十八條をお尋ねになつたのに對して、お答申上げたのである」云はれて居る、然かし此説は何に據つたのであるか云へば、寺に望西樓の直筆を傳へられてある秘藏の尊問愚答記一卷があるが、その奥書の「忽蒙驪龍之尊問進因之愚答」の本文に「龜山天皇以花山院通雅公問」云傍註されてある、寺では此傍註によつて龜山天皇の勅問である云ふて居るが、然かし誰

の傍註であるか詳かでない。殊に又直筆だき傳へて居る尊問愚答記そのものが、果して望西の直筆であるか否かは問題である。ところが懷山の淨統略讚には「尊問愚答記は花山院權大納言家教卿の問を答ふ」と記るされてある。して見るに問の主人公は龜山天皇でなくて花山院家教となつてくる。そして家教卿は花山院家の系圖による寺傳に龜山天皇の使者となつたき傳へて居る通雅卿の子息である。

花山院家忠——(此間三代略)——定 雅——通 雅——|
— 家教——家長——家 定

又この尊問愚答記の出來たのは、凡そ樓師の幾歲頃の事であつたか。心阿の鎮流祖師傳にも了吟の新撰往生傳にも何等交渉なく、淨統略讚これ亦何も述べて居らぬ。法林寺所藏本の奥書には「建治元^乙亥年三月十五日於洛東華藏寺鈔記之^{云々}」
とある。若しも建治元年とせば樓師の三十三歳の時であつて、和漢兩語燈錄を輯録された翌年、悟眞寺創設後、僅か三ヶ年を過した丈である。ところが續淨四卷附録の解題には「永仁五年」とある。然かし之れも何によつて定められたか詳かでないが、永仁五年は大經鈔の出來揚つた翌年であつて、慈心や禮阿等と相寄つて、新撰の大經鈔を精究治定された歲であつて、樓師既に五十五歲、思想圓熟道譽高くして、心阿の所謂「月郷雲客欽尙孔篤」云はれ得る歲頃である。今この尊問愚答記も、此時分に出來たのでは無からうか。若し然りせば此書の問の主人公は、淨統略讚所説の家教も時代の上にて於て合ふて來る。そのうへ此書に於ける問の主人公は諸傳既に、花山院と云は記して居る事でもあるから、龜山天皇と見るよりは、やはり花山院とし、花山院では誰れと定むべきかに就ては、淨統略讚所説の家教と見て來るのがよからうかと思はれる。

二

扱この尊問愚答記の内容は、諸傳いづれも「淨土の要義を述べ」と記るされてある通り、全く要義には相違ないが、

殊に傳通記、決疑鈔なきに於て殘されてある問題なきを、能く簡明に解決され後學の啓蒙に資せられた所多大である。その問答の條目總じて四十八あるが、四十八は問者の方から其れ丈の數を列舉されて來たものか、それとも樓師が四十八の數に仕組んで答釋されたものか、何れにしても四十八願の數によられたものと思はれる。

四十八の問題中、大別して見るに、初の八問題が大經に關したもので、第二十二丈が彌陀經に關したもので、其他は觀經に關した問題と見てよからう。就中注意をひかれるものとしては、十劫正覺以前に念佛往生があつたか(第四問)、彌陀正覺は十界具足の正覺か(第六問)、本國の舌相を此會の衆が見たか何うか(第廿二問)なきの奇抜な問題もあり、又往生の實際問題に就ては、なか／＼懇切であつて、三心の退不等に就て六問、業成に就て四問、自力他力に關して四問、光明攝取に就て四問、臨終に就て四問、何れも見逃すことの出來ぬ問題で、所謂淨土の要義である。殊に釋尊出世の本懷を隨自隨他の二面より之れを捌き、隨自の上に於ける本懷は唯だ念佛往生にありし、淨土經出世本懷は大悲本意に約すこと論じ、時機の上に於ては「若以時機而來收非無勝劣」云ひて勝劣を見て居られる點や、諸經の定散と觀經の定散の同異(第十一問)や、念佛往生と宿善の有無(第十四問)を論ぜし所や、罪障に往生の障りと華開の障りを分別された點(第十七問)なき、又稱名往生の外に聞名往生を認められたる點(第十八問)來迎の上の正念か正念の上の來迎かの問題(第四十五問)なきの要義を、親切に而かも精密に論定せられたる所なき、只敬服の外はない。然かし此書には所謂望西教義として、樓師獨特の主張も云ふべき、心具不生義、機法二面の業成説、赴機の十劫説や、設我得佛の佛に就ての自受用他受用問題や、來迎佛の報化問題なきの所謂三條派としての特殊の説は、來迎に關する問題以外別に現はれて居らぬ。

さて尊問愚答記はさるものながら、選擇大綱抄をはじめ樓師の著述を見るに、樓師は六派中特に勝れたる識見の所持者であつた事が窺はれるが、それにも拘らず、常に傳承を重んじ師説を宣揚することに努め、自家獨特の説を常に顯露に振り翳さ、れなかつた様子、其點實に樓師としての誠にゆかしき性格を物語られて居るように窺はれる。